

An anime-style illustration of a young woman with short, light-colored hair and blue eyes. She is wearing a dark, hooded raincoat with a red scarf wrapped around her neck. The coat is open, revealing a white top. The background is a soft, reddish-pink gradient with vertical lines, suggesting rain. The overall mood is melancholic and mysterious.

憂鬱な日、無口で根暗な  
いじめられっ娘に  
慰められましたして

著:相山タツヤ

まさか、ポツチでモテないこの俺に、彼女が出来るなんて夢にも思わなかった。

その恋人の名は、ツバキ。

彼女はクラスメイトのイジメが原因で不登校になっていた女子で、俺が偶然にも帰り道で倒れていた彼女を助けたのが出逢いの切っ掛けだった。

行き場のない彼女を家に招き、その苦しみ聞いて慰めている内に、ツバキは涙を流して俺に強く縋り付いてきた。そのまま自然と唇が触れ合い……俺たちは初めてのセックスをした。まるで溺れていくように、俺は何度も何度も彼女の膣内で果てた。

身体を重ねれば重ねるほど、彼女に対する俺の愛欲は深まっていった。ツバキに手を差し伸べた俺もまた、心の底では愛情に飢えていたのだ。

ツバキは今も、俺の家に殆ど同棲状態で過ごしている。

俺の親は出張続きで滅多に帰ってこないし、彼女の親も一切ツバキの事には関知してこない。だから俺の家は彼女と二人だけのパラダイスだ。

ツバキはお喋りを全く好まないの、兎にも角にもセックスが一番のコミュニケーション。世のカップルと比較して健全な交際とは言えないだろうが、話下手なのは俺も同じなので、無言で身体を触り合うだけで想いが通じ合えるのは俺は幸せなことだと思う。

一方で、新たな悩みが生まれた。彼女が俺を必要とするように、俺も彼女無しではいけない身体になっていた。

夜、目を閉じるといつも、ツバキの柔らかい蠱惑的な身体と、俺の男性器を優しく包み込む彼女の膣肉の感触が脳裏に蘇ってしまう。そして胸が締め付けられるような想いに駆られ、俺は狂おしくツバキを求めてしまい、欲望が空になるまで彼女を抱き尽くしてようやく眠りにつくことが出来る。けれども朝になると欲望が再び屹立してしまうので、遅刻覚悟でまたツバキの身体を使って射精する。もはや狂気の沙汰、セックス中毒患者だ。

ツバキが側にいない時間が耐え難い苦しみだった。言わずもがな、学校の時間はただの地獄。家に帰ってからも、ちよつとした外出の用事の時ですら彼女が離れず付き添ってくれないと落ち着かない。

俺はツバキに出会ったことで、孤独をいっそう強く恐れるようになった。彼女無しでは

生きられる自信がない。この先、俺はどうなってしまふのだろうか。

もしも、ツバキに愛想を尽かされたり、学校や親の強い反対によって別れる事になってしまったら。きっと俺はどんな手を使ってでも、立ちはだかる障害を片っ端から破壊し、命懸けで再び彼女に縋りつこうとするだろう。

ツバキが居なくなってしまうたら、俺も終わりだ。

そんな破滅的な未来が訪れない事を、今日も俺は震えながら祈り続けている。

——「おい、そこ！ 具合悪いのか？」

俺は、ハッと我に返る。

教壇に立つ教師とクラスメイト全員の視線が、俺に集まっている。

「ざっさからずっと震えて……腹でも痛いのか？」

「あ、い、いえ……だ、大丈夫です……」

俺は恐々と頭を下げる。

「もしかして、もう漏らしちゃったんじゃないのー？ ウンチくせーぞ！」

クラスの陽キャがそんな事を言って、どっと笑い声上がる。教師も一緒に笑っている。

「……………ぐっ」

俺は齒軋りしながらも、何も反論せず黙り込む。俺がこれ以上何か言っても、都合の良いオモチャにされるだけだ。

教師はニヤニヤしながら、また黒板の方を向いた。

「まったく……本当にそうなる前に、トイレ行きたい時は遠慮なく言うんだぞー？ 授業中に漏らされたらかなわんからなー」

「だってよ！ 良かったな、おい！ トイレ行き放題だぜ？」

しつこく茶化されるが、俺は完全に無視を貫いた。やがて陽キャもクラスメイト達も、面白くないという顔つきでそっぽを向いていく。

これでいい。こんな低レベルな付き合いに構ってられない。

だが、胸の内では刺々しい大きな蟠りが残り続けている。口を嚙んで堪えているが、その強いストレスは消えることなく、むしろ一刻も早くここで暴れさせろと俺の胃の中で酷く喚き続けているばかり。このままだと俺の内臓がズタズタに喰い尽くされてしまいそうだ。

湯が沸きそうなほど頭が煮え上がってきた時、ズボンのポケットに入れていたスマホが振動した。

L○N Eのメッセージを送ってくるような友達はいないので、俺の家で待つツバキからの連絡だとすぐに直感した。俺は机の死角で上手く隠しながら、スマホの画面を確認する。

「——！！」

息が止まりそうになった。

LONEには一枚の写真が添付されていた。

黒いレインコートを羽織った下半身裸の女が、自分の女性器を二本の指でくばあ……と開いて見せている自撮りだ。場所は、恐らくトイレの個室。

顔は写っていないが、何度も何度も自らの手で犯してきた恋人の秘部の形は忘れるわけがない。

『ごめん、来ちゃった。よかったら、旧校舎3階の男子トイレに来て。会いたい』

俺は、ほとんど本能で立ち上がった。

「先生、トイレ！」

「……先生はトイレじゃないぞー？」

くだらない教師の返答も意に介さず、俺は教室を飛び出していった。背中からクラスメイト達の笑い声が聞こえてきたが、もはや一切気にならない。

俺は瞬きすらも忘れて一心不乱に校内を駆け、指示された男子トイレに辿り着いた。中に入ると、一番奥の個室だけドアが閉まっていた。今の時間帯は皆授業中なので、普通はトイレの利用者は居ないはずだ。

俺は獣同然の息遣いを漏らしながら、ドアの前に立った。そして、きつく握り締めた拳でノックする。

「……ツバキ！」

もし人違いだったらなどという心配は一切無かった。



ドア越しでも、俺が今一番求めている彼女の気配がはっきりと感じ取れるのだ。いつもレインコートを好んで羽織る彼女が醸す、蒸れて香ばしい汗の匂い。俺を求めていっそう強くなっていく湿った発情臭。間違いなど無い。

ドアの錠が外れ、ゆっくりと開いていく。

溜め込まれた雌の匂いが、むわあっ……と一気に開放され、俺を包み込んだ。下半身に血液が急速に集まり、性欲が膨れ上がっていく。

「————待ってたよ」

独特な闇を含んだ彼女の双眸が、俺を見据えた。

開かれたレインコートの下は丸裸で、汗で濡れた白く美しい裸体が映えた。薄く陰毛が生えた秘部からは、透明な雫が伝い落ち、写真で見た時よりもいっそう生々しく濡れている。

ツバキは、ゆっくりと俺に両手を差し伸べた。まるで全てを見通しているかのような慈悲深さ。

思わず、俺の目から一筋の涙が落ちる。

「ツバキ……!」

俺はツバキに抱きつくと、激しい口付けをした。

彼女の口内を犯し尽くすつもりで、舌をべろべろと絡め合わせる。

「ん……ちゅっ……んん……」

ツバキは心地よさそうに、俺のされるがままにキスを受け入れた。唾液で濡れた柔らかい舌を何度もナメクジのように擦り合わせてきて、俺の昂る性欲をさらに焚きつけてくる。

俺は個室のドアにカギを掛けると、はやる気持ちで自分のズボンとパンツを脱ぎ落とし、再びツバキに強く抱きついていった。先走り汁でぎとぎとに汚れたペニスを、マーキング

するようにツバキの下腹部に、ずりっ、ずりっ……と擦り付けていく。

「……ボクの子宮……ここっ……」

ツバキが頬を赤らめながら示したお腹の場所に、俺は遠慮なく亀頭をぐりぐりと押しつけていく。この白い肌の向こうにあるツバキの子宮を想像しながら、鈴口からトプトプと絶え間なく漏れるカウパーをしっかり彼女のお腹に塗り付けて染み込ませていく。

「んう……ああっ……赤ちゃんの部屋っ……こすられるのっ……いいよおっ……」

彼女の煽情的な鳴き声であっけなく欲望が最高潮に達した俺は、ツバキを押しして便器に座らせた。

ギンギンに赤く猛る勃起ペニスをつバキの眼前に突き付けると、彼女は全てを理解したように自ら両脚を開いた。女性器に指を差し入れ、愛液で潤った桃色の生肉をくちゅう……と広げてみせる。

「……いいよっ……ボクを、犯して……」

舌なめずりをして誘う彼女を見て、俺の中でプツリと何かが切れた。

---

続きは本編で！

---